

## 常識

瀬田康司

それぞれの国はそれぞれの歴史がある。その歴史の積み重ねによって現在がある。もちろん、その歴史は、他の諸国と何らかの交流によって形作られてもいるから、それぞれの国々には接点や交点としての共通の文化の形がある。政治形態もその一つである。そして、その一方でそれらがまたその国の独自の政体を形作ってもいるのだ。

わが国に生まれ、60 数年の生を育んできたこの身にとってしてみれば、好悪の感情はともかくとして、わが国の政体は習い性となっており、それ以外の論理や行動を知る術もない。学校教育の「教科」の形で諸外国について習おうとも、その知識を日常的に生かす場を持たない悲しさ、単なる観念として記憶に留め置かれ、やがては使い道のない観念であることを自ずと習い、忘却の彼方に捨て置かれる。それは何も政体に関する事ばかりではない。生活のあらゆる場面に、文化の受容と創出のあらゆる場面に及んでいるのである。こうして、わが身体に染み込んだ常識が他の人々の常識でもあるに違いないという観念と行動とを武器として日常生活を送ることになる。

身に染み込ませた常識とは、恐ろしいもので、いささかの共通性はあるもののほとんど異なる文化圏に出かけた際に、つまりその場は非日常なのだが、それにも関わらず常識を一寸たりとも思考や行動から取り外そうとはしない習い性となっている。それがわが国に特有のことなのかどうなのかは判然としてはいない。だが、ぼくにとってしてみれば、日本語を聞き取ることもなく、かなり遠方にいる人、人の群を、一瞬にして「日本人」、つまりわが同胞だと見分ける武器となっていることは確かである。わが同胞が、異文化常識を旅の直前にわか仕込みしていても、その異文化常識がわが国の常識に変容されている場合には、さらにさらに、同胞を見分けることを容易にしてくれることも面白い。日頃から常識に対する好悪の情を、おそらく人並みはずれて激しくしているぼくにしてみれば、変容された異文化常識そのものに対しても好悪の情を激しくすることになる。

「え？ルーブル美術館？ベルサイユ宮殿？まあ、暇と好奇心が起こったら、行くことにします。エルメスやヴィトン？終生、縁がないですねえ。」

「だって、フランスでしょ？パリでしょ？ルーブルやベルサイユには行かなきゃ、変よ。それにせっかくのフランス文化なんだから、フランス・ブランドもの一つも手に入れ

の方がいいわよ。日本で買うと高いんだから。」

「ぼくは、日本にないフランス、パリを楽しみたい。ルーブルもベルサイユも日本にな  
いけれど、幾度の革命や動乱で使用された石畳の道、教会を中心に形作られた集落、そ  
して庶民の教化・啓蒙の証であった、集落のあちこちに残されている小さな小さな、消  
えかかっている宗教画、その他たくさん、日本にはないものがありますのでねえ。それ  
にルーブルやベルサイユは無くならないけれど、石畳の道や宗教画などは、無くなる可  
能性が大きいですから。あとブランドものだけど、ぼく自身、顔も体つきも、それに感  
覚も、もしブランドものを身につけたとしたら、ぼく自身の存在がかすんでしまっ  
うな。」

「あなたって、変わった人ね。」

このほかに、アルコールを好まないぼくはワインを自らすすんでいただくことはないし、  
乳製品とりわけチーズもぼくの日常生活の中には進出することはない。ロシア宮廷料理の  
流れを汲むという「フランス料理」は、ぼくに言わせれば、ただただ肩が凝るだけの、そ  
して値がとびっきり張るものでしかなく、自分でお金を出してまで食べたいとは思わない。  
家庭料理としてのフランス料理・フランス田舎料理ならば、自分でも作ってみようと思  
し、その作業に必要なならばワインもチーズもたっぷりを使う。オリーブ油なども料理の  
材料に応じて使い分けたいとも思う。身につけるものとしたら、絶対に日本では買うこ  
とのできない、ぼくという存在を見繕ってくれる、職人の手作りのものでありたい。異文化  
人同士である職人とぼくが心のぬくもりを通わせることができるものでありたい。「あな  
たって、変わった人ね」と言われても、これがぼくの中に染みついている常識のなせる技  
なのである。これを、おそらく、日本社会における常識観で言わせれば、ぼくという存在  
は「偏屈者」、「屈折者」、「非常識人」という形容になるのだろうとは、おぼろげながらも、  
理解はしている。

ぼくの常識つまり日本社会における「偏屈」「屈折」「非常識」は、ぼくらの精神形成史と  
大きく関わっていることは事実だ。だが、そのことについてここで触れたいとは思わない。  
ただ、フランス・パリというところに一年間居を構え生活をしたほか、ほぼ毎年のごとく  
訪れ、人と交わり、研究資料を追い求め、その意味解釈をしてきた経験もまた、ぼくの常  
識を形成してくれたことも事実である。これから後は、そのことの具体を語ることにしよ  
う。今回の旅の大きな目的と一定の到達でもあるのだから。

たしか、日本の学校教育、とりわけ世界史教科で、「コミュン」という言葉が二度登場してくる。一度目はフランス封建時代の自由都市として、二度目は1871年の「パリ・コミュン」としてである。もしかしてぼくの記憶のかすか彼方に残っているラテン語の *communla* (コミュンラ：共有) は、「コミュン」を教えてくれた高校教師のサービス言語の名残であるのだろうか。ともかくも教科書内容としての記憶はそれ以上にはない。ぼくが2000年にフランス入りしたときの知識はこの程度であった。この程度の知識から形成される推察能力は「コミュンとはフランスにおける歴史的概念であり、極めて限定的に使われるものだ」ということである。もちろん、事前にフランス史を十分に学習しておけばこのような乱暴な類推に満足することはなかったのであるけれども、正直なところ「コミュン」についての問題意識も何も持たなかった当時としては、精一杯のぼくの常識であった。

パリの街を散策する余裕が出てきて、古ぼけた、いかめしい構えの建築物の前に立つと、**ECOLE COMMUNAU**X (エコール・コムノオ) と石に刻みつけられた文字が目に入るようになった。辞書で *communau*x を確かめると *communal* (コムユナル) の複数形とある。字義は「公共の」という形容詞である。従って、*école communal* は公立(小)学校の意味となる。*écoles communau*x は複数の小学校を意味するが、フランス共和国は男女別学であったから、男児学校、女児学校を併せて **ECOLE COMMUNAU**X と名付けていたのである。もちろん現在は共学制であるので、そのいかめしい建築物の **ECOLE COMMUNAU**X という彫り文字は歴史の遺物であることを意味している。ちなみに、それらの建築物は、現在も学校として使われていたり、まったく学校とは無関係な商店、アパートとして使われていたり、様々である。ついでのことながら、現在も公立の学校として使われているとしたら、必ずフランス国旗が掲げられている。*école privé* (エコール・プリベ) すなわち私立学校にはフランス国旗は掲げられていない。フランスのおおかたの建築物はその外容だけでは何を目的としている施設なのか判然とはしない。それで公共建築物にはフランス国旗を掲げることによってプライベートなものかそうでないかの区別をしている。なるほど国旗とはこのような使われ方もあるのかと、感心した。国旗＝愛国心という観念を、「日の丸」論争の渦中に置かれてインプットされているわが身にとってみれば、まったくの新しい発見であった。国旗、まさしくそれは、同一政体、同一言語、同一生活習慣を共有する者の象徴であるわけで、その印があるところは、誰もが共有すべき財である、という意味をなす。まさに、国旗は *communal* な存在なのである。

communal は commun (コマン) の限定的な用法である。commun とは「共通の」「共同の」「普遍の」との字義であり、それが女性名詞を形容するときには commune (コミュヌ) と変化する。「共同作業」は travail commun (トラヴァイユ・コマン)、「共通語」は langue commune (ラング・コミュヌ)、「常識」は sens commun (サンス・コマン) という使用例を挙げることができる。どうやら、commun というのは二つ以上の間を取り結ぶ、そのあり方を形容するもののようであり、名詞形は、ぼくたちが日常的によく使う communication、つまり、コミュニケーション、フランス語風に発音すればコミュニケーションとなる。・・・と、こうした言語学的探求だけでもかなりのスペースを割くことができるのである。

ぼくは日本社会の中で生まれ育ってきたからフランス語に触れる機会と条件は極めて限定されていたことは当たり前のことである。わが社会では「コミューン」は極めて限定された条件でしか使うことがないと言って、取り立てて卑下的に自分の学習史・生育史を語る必要はあるまい。そうであったとしても、コミュニケーションという言葉は今やすでに日本語として定着している現実を考えると、その日本語語義（通信、伝達、交流、交通など）への当てはめの作業もさることながら、その原義が何であるかについての思考はもう少し進められてもよいのではないかと、フランス生活の中で教えられた。そうすれば、コミューンとコミュニケーション（コミュニケーション）、さらにつき進んで言えば、コミュニズムとが乖離した概念として意識化されるという、わが貧困な言語感覚は存在しなかったはずである。先にささやかな例を示したが、commun を語幹とする単語を使用する場面が至る所にあることを知ったわけであるからだ。

ぼくが commun にこだわりを強く持つようになったのは、ECOLEES COMMUNALES という言葉との偶然の出会いからであることも事実だが、わが国の歴史教養である「パリ・コミューン」に研究的関心を強く持つようになったことが大きい。フランス公共図書館の使用になじみを持つことができなかつた頃は、連日のようにあちらこちらの古書店に足を運び、関連文献を探し求めていた。その当初は、しかし、店主に「パリ・コミューン関連の文献はありますか？」と訊ねても、ただ首をひねられるばかり。フランス語発音がまるで通じないものらしいことが分かり、英語に切り替えて再度訊ねる。それでもいっこうに店主にこちらの意図が伝わらない。最後の手段にと、筆談に切り替える。Paris-Commune。だがどの店の主も首をひねるばかりであった。困り果てたぼくは、「困ったときのローラン頼み」で、フランス人ローラン・レヴィさん(M. Roland LÉVY)に援助を求めた。しかしながらである、くだんのローランさんは「パリ・コミューン？分かりませんね。もう少し詳

しく話をして下さい。」との返答である。私の説明を聞くなり、「ああ、1871年の **la commune de Paris** : ラ・コミュヌ・ド・パリですね。日本ではパリ・コミューンというんですか。フランスでは、まず、そのような言い方はしませんよ。」と言うではないか。日本の学校教育で教わり、辞書にも載せられている「パリ・コミューン」の言葉は、フランス語風ではありながらフランス語ではなかったのである。この常識の崩れはかなり衝撃的であった。衝撃的ではあったが、それはぼくのフランス語力貧困のなせる技だとあきらめることができた。

ローランさんに教わったぼくは、意気揚々と、「**la commune de Paris** 関連の文献はありますか？」と古書店を訊ねた。だが、店主から意外な言葉が返ってきた。「**la commune de Paris** と言っても、いろいろあるが、あなたの知りたいのは何なの？」というのである。ぼくには店主の言っている意味が分からなかった。**la commune de Paris** と言えば「パリ・コミューン」のことではないのか？それ以外何があるというのだ。店主におそるおそる尋ねると、**la commune de Paris** というのは、大まかに言って、フランス革命期のと1871年の коммуニストの運動のと、それからフランス革命期から現在へと続く行政区分のパリことと、三つを意味する、あなたが探しているのはそれらのうちのどれなのか、と言うではないか。さらに付け加えて、残念ながらそれらはうちには置いてない、別の店を探しなさい、と。この時の衝撃度は絶句したとしか形容の言葉を知らないほどである。語学力の問題以上に、フランス社会についての無知・無教養をいやというほど思い知らされたからだ。しかしながら行政区分を意味する **la commune de Paris** を知ったことは、その後のぼくの、フランス政体を見る目を大きく養ってくれることになった。内なる常識が完全に崩されたとき、はじめて、他なる常識の意味の理解への道が開かれたわけである。

その後の学習で知り得たことを二、三付加して、この項を終わりにしよう。

フランス社会に **la commune** の政体が成立したのはフランス革命期である。1789年12月に、アンシャン・レジューム (**Ancien Régime** : フランス革命前の旧制度) 下において教会を中心として政治支配の形が取られていた小教会区 (**la paroisse** : ラ・パロワス。旧体制下における地方行政の単位) を **la commune** として再編した。以降、フランス共和国において地方行政の最小単位を **la commune** と呼んでいるわけである。現在まで何度かの法改正によって **la commune** の区割り・組織方法が変わっており、現在では、フランス本土 (**métropole** : メトロポル) で 36,558、海外県 (**les départements d'outre-mer** : レ・デパル

トマン・ドットルーメール)で 114、その他 19 の la commune がある。わが国での地方行政の最小単位は市・町・村であるが、敢えてこれらに la commune をあてはめる研究論述が多く見られる。ちなみに、ユーロ諸国にも la commune に相当する組織があり、例えば、ドイツは 8,500、イタリアは 8,090、スペインは 8,056 の数がある。フランスが群を抜いて多いが、それはフランス革命以降の様々な政変、動乱のたびに、「共和」の意味が問い直されたからであろうか。

la commune が成立したといっても、la commune がそれ以前の la paroisse を下敷きに行っている以上、キリスト教会の支配や影響が、民衆の日々の生活から無くなるわけではない。その後のフランス史は、じつに、教会支配や影響を、いかに政治や経済などから遠ざけるかにあった。つまり宗教支配からの自立 (laïcité : ライシテ。政教分離、世俗性) が大きな課題となる。また、フランス社会の庶民教育はカトリック教会による教化・啓蒙と密接に関わっていたから、la commune 成立後も宗教教育は強い力を持っていた。政治的な世俗化を進めるということは、同時に教育の世俗化を進める課題を必然的に持つ。小教会区ごとに公立小学校を設置し初等教育を庶民に義務化することによって国民を啓蒙しようとする試みもなされるが、教会による宗教教育の強い伝統はそれを阻むものともなっていた。公立学校教師の免許状授与資格の実質を教会が握っていたからである。

教育を世俗化し、義務教育を完成させる試みや思想はフランス革命以降、様々になされている。それを一体化した普通教育、すなわち世俗教師による世俗教育、義務教育、そして無償教育の必要を強く感じたヴィクトル・ユゴーは、1850 年 1 月 15 日の国民議会演説で、無償・義務教育を「子どもの権利」だと強く主張した。ユゴーは言う、「教育について問う私の理想とするものは、無償かつ義務の教育。義務は初等教育に限り、無償はすべての学校教育に対してである (右翼で不平の声——左翼で拍手喝采)。義務の初等教育、それは子どもの権利である (不平の声)、疑いもなくそれは、保護者の権利以上に尊く、国家の権利に並び立つものである。・・・厳粛な公教育は国家によって与えられ整備されるが、それは村の学校に始まり、順次コレージュ・ド・フランスに進み、さらにはフランス学士院へと及ぶ。すべての重要な学問の扉は知性あるすべての人に開く。場がある至る所に、精神がある至る所に、書物があるであろう至る所に。小学校のないコミュは無い、コレージュのない市町村はない、大学のない県庁所在地はない。・・・至る所に才覚を呼び覚まし、そして至る所に素質を温めるのだ。・・・」(Victor HUGO: ' le droit et la loi et autres textes citoyens' , Choix établi et présenté par Jean-Claude ZYLBERSTEIN. p.229) この

主張に対して国民議会の多数派を占める、すなわち教会勢力と結びつきを強くしている議員たちが強い不満の声を挙げていること、ならびに無償・義務教育を子どもの権利とした彼の慧眼に対して、この時期、賛意を示す者がいなかったことは、引用した演説記録に示されている通りである。

ユゴーのこの演説の 21 年後、パリにおいて、世俗教育、義務教育、無償教育を子どもの権利とする学校が実現することとなる。その主体が *la commune de paris 1871*。フランス歴史学では *la Commune* と表記されている。*la Commune* は、その « *Commune* » 概念に関して、J.-J. ルソーの「社会契約論」と共通するものを描き出したと言われる (*Jacque CHASTENET: ' L'ENFANCE DE LA TROISIÈME' , p.79*) が、主権者が社会的契約関係を結ぶことによって自らの意志を普遍化することができるという *sens commun* を形成する方法は、教育にかけられた重大な使命である。だからこそ、すべての子どもが無償で、特定の宗教やイデオロギーから自立した教育を受ける権利を有しなければならない。

ユゴーは *la commune* を社会の最小単位とし、そこが才覚と素質、すなわち知性が秘められた共同体であると見ていた。そして知性はすべての人々のものであり、人々が、支配的なイデオロギーにだまされず、自らが個人として確立するために教育を組織することを強く願っていた。それは、教会勢力と結託し、民衆を衆愚と見なし、だからこそ教化・啓蒙のために義務教育が必要であり、その後は「選ばれた人間」(エリート、社会的有用人材)の形成のためにこそ教育が必要だとした「右翼」の議員たちの教育論とは、根底から異なっている。ユゴーの教養論的な社会観を知るにつけ、昨今のわが国の教育界が、教養論を解体し、能力的選別と再編成という強烈な社会イデオロギーに寄りかかり、そのための教育方法改革、学校制度改革に大きな傾斜をかけている実状にたいして、大きな危惧を抱かされてしまう。教養論を後退させた能力主義、しかもそれは人間の諸能力の、いな知性に限って見たところで、ごく限定された領域の知的能力なのだが、その競争主義によって培われた常識は、他者の常識から謙虚に学ぶというコマンな感覚をさらに遠ざけることにならないだろうか。

使用言語を聞かなくとも誰何を瞬時に識別できてしまう常識という衣にさらに鎧甲を付けてしまうわが身、わが同胞を想像することは、まったく困難ではないのである。